

「志縁の苑」ぎやらりーは、ひとり静かに画と出会い、自分と出会う対話の場です。大谷久子の50号～150号の画を94枚所蔵していますが、ささやかなアットホームな空間なので、残念ですが6枚しか展示できません。毎年展示替えしても、十余年はかかりそうです。

2013年は下記の作品を展示しています。  
人々(1959年) わたしのヴァカンス(1969年)  
逃避(1970年頃) 火の鳥(1972年) 女たち  
(1982年) 女たち(2010年絶筆/89歳/表紙)



#### 大谷久子略歴

1921 北海道西興部(にしおこっぺ)村に生まれる。北海道庁立名寄女子高等学校(現北海道名寄高校)在学中に、道展及び第一美術協会展(東京)入選。女子美術専門学校(東京)入学、在学中'40 二科展入選、女子美卒業。  
1944 夫 道雄と結婚。  
1945 死別(3.17 硫黄島玉砕)、長男誕生。  
1947 全道美術協会 会友、'53 同 会員  
1951 行動美術協会 会友、'55 同 会員。  
2011.9.9 没  
全道美術協会会員 行動美術協会審査員

「志縁の苑」ぎやらりー

〒384-2202 長野県佐久市望月804  
「歴史を拓くはじめの家」内  
tel/fax 0267-53-5858

<http://hirakuie.jimdo.com/>

米倉テルミ

『わずか十六歳の少女、第一美術展に入選。』北海道地方紙は、五段組で大きく報じていた。1936年(S.11)秋のことである。少女久子は北海道庁立名寄女子高等学校四年生。前年の1935年(S.10)には全道展に入選し「花形作家としてすでに定評がある」と別の地方紙名寄新聞は報じている。

久子は1944年(S.19)23歳で前々からの友人大谷道雄氏と結婚、わずか三十日間を共に暮らしただけで、翌1945年3月17日硫黄島の玉砕で夫君を失った。同年7月25日に、長男の巖くんが生まれた。20日後、日本は無条件降伏をした。

久子と逢ったのは1957年(S.32)。以来毎年欠かさず行動美術展に出かけた。久子は100号前後の大作を、いつも出品していた。始めて私が出逢ったのは、忘れもしない二人の人物が、描かれていて、骨格だけの二人が歩いていた。人は次第に増えて行き……。個展では花々の絵が……。風景が、海が。……。彼女の才能がおどっていた。

絵を観るだけで、何故か私は毎回納得した。そのまますんなりと、彼女が素敵にそこにあるのだ。彼女から作品の解説を受けたことはない。彼女は率直で、素直で、誠実で、あたたかで、……。彼女の絵は年々変化を率直に具現していた。彼女はいつも明るいい人だった、剛直とでも言いたい正直さで、でもはてしなくやさしかった。

別れたあと、いつも、何故か私は哀しいのだった。

女たち

米倉齊加年

大谷久子とケイテ・コルヴィッツ(ドイツ人)は活躍した時代は違いますがよく似ている。

大谷は若き夫を太平洋戦争(硫黄島において玉砕)で失った。コルヴィッツは息子を第一次世界大戦で失った。

大谷は油彩、コルヴィッツは版画・彫刻と表現手段に違いはあるが、二人は生涯通して戦争に反対し、人間の自由と解放を追い求めた、コルヴィッツは母の立場から、大谷は妻の立場から。しかし戦後の混乱の中で大谷の目は妻の立場から自立する女へと向けられ、人間群像が〈女たち〉の群像へと進化していった。

その道筋で大谷久子は  
もろさわ ようこ と出会った――